

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 大曾根宏亮 印刷 常陽新聞新社



今年度整備された新グラウンドで練習する野球部

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠 作曲

一、沃野一望數百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の氣魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

- 2面 平成17年度総会報告
会長あいさつ
- 3面 学校長あいさつ
- 4面 恩師を訪ねて
- 5面 卒業生レポート
- 6面 卒業生レポート
- 7面 支部だより
- 8面 お知らせ・お便り
- 9面 母校だより
- 10面 職員室だより・各部だより
- 11面 進路だより
- 12面 平成16年度決算報告等

平成十七年度

進修同窓会総会開かれる

去る平成十七年四月十日(日)、平成十七年度定期総会が、母校体育館にて約三六〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

晴天の事もあり、旧本館玄関前庭において、記念写真撮影などもあり、総会前から、和やかな雰囲気になっていました。

総会は、まず、昨年度と同様に、弦楽部の演奏に続いて、応援指導部の指揮の下、吹奏楽部の演奏に合わせ、校歌と一高賛歌の斉唱、物故会員に対する黙祷の後、幡谷祐一会長、村松輝美新学校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長として以下の議案が審議されました。

た。

◇ ◇ ◇

一 平成十六年度事業報告及び決算報告

二 平成十六年度進修同窓会基金及び決算報告

三 別途積立金報告

四 平成十七年度事業計画及び予算

五 平成十七年度進修同窓会基金予算について

六 その他

進修同窓会基金管理委員会と進修同窓会基金を次年度より廃止し、同窓会の予算に組み込むという案件が提案されました。

十分な審議の後、全議案とも満場一致で可決・承認されました。

本年は中四十回(六十周年)、高七回(五十周年)・定時五回(五十周年)、高十七回(四十周年)、定時制十五回(四十周年)、高三十回・高理九回(二十五周年)、定時制三十回(二十五周年)の方々をお招きいたしました。

祝賀式では、高八回で来年五十周年を迎えられる大野金一氏より祝辞が述べられました。招待者の記念品贈呈の後、高七回卒の石田晴久氏より、本年五十周年を迎えられた皆様を代表して祝辞が述べられました。

また、会場を別にしての祝賀会では会場一杯の参加者のもと、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。



会長あいさつ



応援指導部指揮による校歌斉唱



祝賀会の模様

同窓会会長あいさつ

「正直」

会長 幡谷 祐一



大切にしたいものです。

私が主催している新年会で今年、正直という言葉を大書して掲額したところ、多くの方々から久し振りに出会う言葉、あるいは新鮮ささえ覚えたと言われ、返答に窮するほどでした。

また、私は最近、ユダヤの商法という本を読む機会がありました。その最初の言葉が「正直であれ」ということでした。祖国のない民が生きていく上で最も大切なことは、総て正直を基本とすることだと言っています。

また、「正直は最良の商策」とし、「正直は最強の武器」とも言っています。そして、「正直に恐いものなし」「正直は最大の宝」と結んでいます。

正直は尊法を怠っていないのと同じです。規則が守れなければ、最後には落ちこぼれてしまいます。最後には落ちこぼれてしまいます。「法治国家の民らしく生きよう」と訴えております。

個人はもちろん企業も、何事においても正直に行うことで世間の信頼を受けることができることを確信しています。

私は金融業、自動車販売業等をしておりますが、この八十三年の人生、正直に貫いてきたおかげで今日の盛業に達したと信じております。

今、当たり前のことを当たり前にできない人や、やろうとしない人が多く見られます。人それぞれではありますが、土浦一高出身者、また在校生諸君はこの古くて新しいテーマ、正直を旨とすることにより、この変化の激しい二十一世紀を見事乗り切っていくことができると思います。

法治国家の民らしく生きよう。

正直は、ありふれた、代わり映えない言葉であり、すっかり死語になっているのではとさえ思われます。しかし、今の日本人にとっては最も要求されることであると言えます。

某自動車メーカーの不正直に端を発して、ここ数年の間に不正直が次から次へと露呈しました。日本を代表する世界的な商社がデータ改ざんをしていたことが発覚して世間の指弾を浴びたり、日本の農業の総本山までもが摘発されたりと、もはや言葉も出ない状況です。偽札の使用や公文書偽造や日常茶飯事のことになり、国の行末が案じられます。不正、不正直が当たり前のこととなりつつある今の世であると言えます。

造花やドライフラワーが生きた花の代替として飾られるようになり、社会の認知を得るところまで拡がっています。役割のあるにせ物ではありますが、それらが恥ずかしくもなく堂々と闊歩することが常になってしまっていることも、奥底では世の状況とつながっていると思われまふ。たとえ枯れかけていたとしても、造花よりも本物の花を

「同窓会会報に寄せて」

学校長
村松輝美

旧本館の前の木々も葉を落とし、冬の寒さがきびしい今日この頃となりました。進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃は本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただいておりますことに心から御礼を申し上げます。

お陰様で本校は、創立一〇八年という長い歴史と良き伝統を継承し現在に至っております。また、昨年度、本校のランドマークとなっている旧本館は、竣工一〇〇年目を迎え、校旗制定一〇〇年の県下中学連合野球大会一〇〇年の「三つの一〇〇年」を祝う諸行事が同窓会の皆様のお力添えによって開催されましたことは、本校にとりまして大変意義深いものでありました。

このような折り、私事になりますが、前校長のご退職の後を受けて、県立牛久栄進高等学校から母校の校長に就任することとなりました。

した。教諭として昭和五一年度より一五年間勤務して以来、一四年ぶりに戻った母校はエネルギーに満ちあふれた生徒達がしつかりと活動しており、改めて、その任の重さを痛感している今日この頃でございます。どうか今後ともご指導とご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

ここで本校の近況につきましてご報告をさせていただきます。

第一に、入試状況でございますが、今年度も目覚ましい実績を上げてくれました。まず東大ですが二六名(新卒一五名)が合格しました。この結果、三〇名台こそ逃しましたが、全国公立高校中の第三位(岡崎高校二八名、浦和高校二七名)に位置しています。京都大に七名(新卒六名、一橋大一一名(同七名)、東工大七名(同六名)、東北大二九名(同二一名)、筑波大四六名(同三八名)の合格者を出し、健闘いたしました。この結果、新卒生徒の国立大合格者は一三五となりました。また、私学におきましては、早稲田大九六名(新卒六〇名)、慶応大六一一名(同三一一名)、東京理科大九三名(同四五名)の合格者を出しています。ただ、この合格者数に対して、進学率については、近年六割前後というのが実態であります。これは、超難関国立大を第一志望として他を受験しない、私立大を併願

しても第一志望を目指して進学しない、という構図が根強いというのが現状であります。ならば、もっと早くから取りかかる必要があるのですが次に述べるような現実もあり、本気になるのは三年生の六月からという生徒も多く、時として切歯扼腕という心境に陥っております。

第二に、生徒のクラブ活動についてですが、相変わらず自主的活動が活発に行われており、本校の三大行事である「二高祭」「一高オリンピック」「歩く会」などでは、生徒が自主的に実行委員会を組織し、企画・立案の段階から運営・実施、反省・評価に至るまでを取り組んでおります。今年度の「二高祭」は、「Follow me」見よ、これぞ私色」というテーマで行われ、生徒それぞれが個性を発揮して盛大に開催されました。現在の一高生を見るにはこれが一番かと思えます。是非ご来校をお待ち申し上げます。また、「一高オリンピック」(球技会と体育祭を併せたまうなもので学園祭が六月にシフトして以来、九月に実施され今年は二八回目)、「歩く会」(ウォークラリー)のことでマラソン大会に変わって実施されて以来今年は三七回目。についても、体力に応じ、或いはチームワークを発揮し全力で挑戦する姿勢には心強いものを感じました。また、部活動については、加入率が八〇%文化部・約三〇%運動部・約五〇%を超えて、県内でも部活動が極めて盛んな学校の一つとなっております。

第三に、施設整備面について申し上げますと、体育館がブルー脇の鹿島神社側に建て替えられたことに伴い、運動場・テニスコートの改修がなされました。引き続きテニスコートについては夜間照明の工事に入っております。また、旧正門の改修等と併せて旧本館の塗装工事が終わり、昔の色合いを取り戻しました。

前述しましたように、本校のランドマークとなっております旧本館は、明治三十七年七月に上棟式が行われ、翌年三月に完成したものです。昭和五一年には国の重要文化財に指定され、一般市民の方々も数多く訪れ、文化遺産として親しむをもって見学されております。この陰には、同窓会の旧本館活用委員会の皆様の並々ならぬご研究とご努力があることに深く感謝を申し上げます。外観は昔のままですが、内部は旧職員室を初めとして、旧教室等が展示室として整備され、在校生にとりましても、復元教室での授業、弦楽器の演奏会場、生徒の絵画作品の発表の場等に活用されており、本校の歴史と良き伝統の重さを感じ取る空間となっております。また、フィルムコミッションから、ロケ使用等の問い合わせも結構あるのですが、現実には教育活動をしている場所であり、撮影に協力できる範囲は限定されてしまうことなどが今後の課題となっております。

最後に、これからの本校の課題等についてですが、ご承知のようにつくばエクスプレスも開通して県内の私立中学校ばかりではなく都内の私立中学校までが虎視眈々との噂も耳にします。日本の社会が今後ますます国際化、高度情報化、少子・高齢化していく中で、社会に貢献できるよう、知徳体のバランスのとれた人間として生徒たちを育て、送り出しながら、どのように現在の進学実績を維持、発展させていくかと言うことにつきまかと思ひます。幸いにして本校の生徒は、誠実で素直な性格の持ち主が多く、主体的で、自らの判断により行動できる素質を有しています。要は、その素質をいかに磨くかであり、妥協を許さずにより高い知性と徳性を備える切磋琢磨の機会を造り出していけるかと言うこととなります。努力して参りたいと思います。

また、中学生向けの学校案内パンフレットのなかで、本校の目指す教育を「[BE A CREATOR OF THE FUTURE] (未来への創造者たれ)」とメッセージ化し、「高い理想と自己実現」を目指し、「自主・独立の気風」を継承しつつ、「百年の歴史と伝統」を有する、「未来を拓く、若人の学舎」であると本校を位置づけ、本校のブランドスローガンを「[FLAGSHIP HIGH SCHOOL]」として意識の高揚を図っております。

以上が主な学校の様子ですが、本校の発展は、時代を超えて旧本館で学んだ同窓会の皆様方が築きあげられたものであり、心から敬意を表すると共に、厚く御礼を申し上げる次第でございます。どうぞ、お近くにお出かけの折には、本校にお立ち寄りいただき、今後ともご指導とご支援をお願い申し上げます。ご挨拶、ご報告と致します。

恩師を訪ねて

⑨

古橋

靖先生

(現在八十歳)

聞き手 幕内川 研 司 治



—先生はいづる教員になられたのですか。

【古橋】土浦一高が最初で最後だ。終戦後すぐにとめたからね。

最初は教員になるとは思ってなかったからね、親父がひとりでしたからね、戦争で混乱した時代だったからね、兄はそのころまだ軍隊から復員していなかったし、お袋が死んでね一人でいたからうちにいなければと思ってね。それで教員になったんだ。校長先生は渡邊文弥さんでね。そのころはね、今みたいにきちんと試験はなくて、校長先生にあって面接でね、やったらいいだろうというこで教員になったんだ。今のうちに試験なんか無くておほらかなものだったね。私はね、今はなくなつてしまった筑波線で通っていたんだ。私が教員になったら、親父が教員だったのね、喜んでくれてね、その結果、長くつとめる結果になったんだ。それが、始まりなん

だ。親父が喜んでくれなかったら直ぐ止めてしまったかもしれないね。—先生がおつとめになった敗戦後困難な時代の生徒の様子はどうだったでしょうか。

【古橋】そのころは、世の中が混乱しててね、今みたいに区切りがあるきちんとした社会でなかったの、おもしろかったよ。そのころは、併設中学というのがあって、中学だけで終わった生徒もたくさんいたね。そうね、生徒は、今みたいに広域でなくて生徒の通学も限られていたね。筑波線や常磐線で通う生徒が多かったね。自転車で上半身裸で来るなどという豪傑もいたね。

戦後まもなく、学校が多くなかったし、希望者も多かったね。定員は50人だったけど、55〜6人だったね。まあ、希望者が多かったから余計に入れたんだね。

机と椅子が一体型となったあの本館にあるのが50以上もあると、横に動かすこともできないし、後ろを通ることもできないくらいぎつちりだった。だから、机と椅子が分離しただけでもすごい進歩だったね。併設中学があったから6学年いたから、3クラスずつだった。だんだん併設中学が無くなるとね、クラス数も少しずつ増やしていったんだね。学校の校舎もだんだん増設していったね。だけど、併設中学が無くなった直ぐには、6クラスにはならな

かったね。

プールはね、他の学校ではなかったから、他の学校からうらやましがられたね。みんなプールの授業は喜んでやっていたね。

男子校であつたんだが、共学が建前になったね。でも、女子生徒が増えるまでは、数が少なかったからね、制服もなかったね。女子生徒は、自由な服装をしていたね。まあ、自由とはいっても全く自由と違ったわけではなかったからね、きちんとした服装をしていたね。男子は、学生服を着ていたね。生活は食べ物も大変な時代だったからね。片見商店はそのころあつたね、そこに食べに行く生徒も多かったね。

—そのころの土浦一高の部活動はどうだったんでしょうか。

【古橋】野球部はね、遅くまでやつていたね。遠藤さんは、野球部を一生懸命にやつていたね。そのころ、甲子園に行ったときは、柳下という優秀な左ピッチャーがいたね。その時は良かったね。見られる試合をやつたね。彼は実業団の野球に行つたね。安藤君という野手もいたね。木内君はそのころ生徒として野球部にいたね。野球部やバレーはよくやつていたね。

—先生がいた頃の土浦一高の学習状況はどうだったんでしょうか。

【古橋】そのころはね、菅澤先生がいてね。朝鮮から帰ってきてね。大変男性的な先生で名前が虎彦だったの、虎さんと呼ばれてね、声の大きい人でね「学生は勉強しなくてはだめだ」と言つて怒鳴り回したからね、そのころの生徒も割と言うことをよく聞いたからね。だからだんだん勉強するようになつたんじゃないかね。ただね、家庭の状況で上級学校へ進学できないとあきらめざる

を得ない生徒が少なくとも一クラスくらいあつたからね。

進学ができない生徒は別として多数は、上級学校を目指すのがよいので、努力して良い学校へ行つて社会の手がかりをもてという指導をしたね。

今なんか水戸一を抜いているけど、初めのころは進学実績はあまり良くなかつたね。それほど、勉強は好きじゃなかつたんだらうけどね。まあ気分としてはね、進学校だったね。土浦は商業都市だからね、三高に進学する生徒も多かったね。

現在は隔世の感があるね。いまは、県南の方が一概に社会状況もあるしね、個人個人に責めを負わせるわけにはいかないからね。個人別にはいろいろ志望があつたかもしれないが学校全体のカラーとしてはね、進学に重きを置く学校ではなかつたんだね。土浦は、商業都市だったからね、僕から言わせれば軟派だったね。僕から言わせれば、土浦は発展していたからね。田舎ほど硬派なんだよ。都市化してるほど軟派なんだよ。

僕は、みんなで進学指導部というのは作つたんだね。校長は何も言わないからね。進学を指導するためには、手元の資料を集めなくてはならないので、学習範囲に関わらない実力試験と称して、模擬試験を行つてね、少しずつ資料をだんだん集めていったんだね。進学実績と成績を取つておいたんだね。

そのころは、自分の所しくないからね、そこを最初は頼りにするしかなかった。だんだん業者の試験を混ぜてね、だんだん資料を集めて確実にしていっていったんだね。資料が多ければ多いほど広範囲で信頼性が高くな

るからね。過去の大学入試と対応させて分布表を作つていったんだね。資料を頼つて指導していったんだね。

—それでは、進学指導部は先生が中心になつて作つたんですか。

【古橋】僕一人というわけではなくてね、一人の力ではできないからね、みんなできつてやつたんだね。最初はどうやっていいかわからないので地方の学校を見に行つてね、発想としては、土浦は田舎だから、田舎ものの頑張りやろうと言うことになつて、地方の高校を見に行つたね。

昔は、進学指導部なんか無かつたからね、旧正門の近くに小さい汚い部屋をもらつてね、誰でも利用できる部を作つたんだね。掃除が大変だったね。熱心な先生がたくさんいたからね、資料を累積して保管して、進路指導部をつくつて勉強しろと言う指導をした。スローガンは「東京を見ろ」と言う指導をしたんだね。初めの頃は、東大なんか一人いるかどうかだったね。まだ、「上がいる」という指導をしたね。

親が東京へ転居して日比谷高校へ転学した生徒がいたので、その生徒からいろいろなことを聞いたね。いろいろ聞いたが、これは参考になつたね。だんだん資料を集めて、材料を集まつてきたので進学要覧というものを作つていったんだね。何人かで部屋掃除をしてから、進学要覧を作るまでは5〜6年かつたね。一緒にやつたのは菅澤さんと片岡さんと一緒にやつたね。厳しい指導をしたので、反感を持つた生徒がいたかもしれないね。

—長い時間ありがとうございます。

卒業生レポート

⑨

21世紀を創ろう

関・空間設計
代表取締役

関 信 男

高七回 (昭和三十年卒)



木漏れ日の中を漫(そぞろ)ろに歩く程にどこからか葉の音が聞える。高校時代、教室を抜け出し友と見た映画・グレンミラー物語の一場面を彷彿とさせる。音源は中庭にあり、そこ、ここで十名程の生徒がトランペット、トロンボーン、クラリネット等の音合せをしていた。空気が精気が満ちて好ましい。

一色さんの講演は、重文指定の実務に携わった建築文化史の専門家の話だけに意義があった。

高校時代のことを一つ紹介しよう。柳生博君と二人で映画館をつくろうと、まず私がゴシック建築の高窓から飛び降りる。すると柳生君が私のカバンと靴を投げ、飛び降りる。次の者が彼の持物を投げて寄越すのだが、二人に続く者は無い。いつも二人だった。当時海外の文化は洋画から吸収した。関連する活字を読みた二人は、規格外の生徒だったのだろうが、当人は俺達が保守本流とばかりに、結構大真面目だった。

東北大学に金属研究所があるのと知り工学部に入った。哲学の最初の講義で異論を感じ先生に手紙を書くこと、長文の返事をいただき価値観が根底から変わった。新たな展望を得てポート部に入った。サルトルやカミュに触れ、文学部転部を考え始めた頃、ある心映えのする先生に巡り会い、人文学と工学の接点に建築があることに気づき、三年からの専攻を建築とした。

私も東北大学で推薦入学の面接官を務めたが、元気のいい女子が目立った。良し悪しは論じないが、参考に米英の事例を紹介しよう。戦後我が国では米国の強い女とやさしい男の姿のみが伝えられたが、実はそこは男が仕切る国なのだ。仕切られる女にストレスを生じさせないようレディファーストを行う。因みに財布は男が握っている。

土浦一高ではクラブ活動にも力点を置いていたようで好ましい。授業が終わった後も暗くなるまで部活に励むよう指導しているという。校風の一端は幾分感じとれたが、当初の不安が完全になくなったわけではない。校風・伝統はどのようなように形成されるのだろうか。歴史・時代

精神・地域文化等の総和として自然に醸成されるのだろうか、事始の時に醸成されたように、歴史の重要な変換点には意図的・思惟的に創る、或いはシフトさせることが重要かと思う。今がその時期と思う。どうだろうか。

建築は、地球上のある場に造る建築物を、人と環境と経済の関係で成立させるものだから、かわる分野は実に広い。物理的・生物的自然・都市・交通・歴史・文化・デザイン・音・材料・構造・設備・安全・法律・生産など万般に亘る。建築は総合学なのである。

一昨年秋に開かれた「土浦一高校舎竣工百年祭」に母校を訪れた。一色史彦さんの、設計者・駒杵勤治氏に関する講演も聴きたかったが、四半世紀振りの訪問なので、気になることが幾つも湧き、疑問を解きたかった。今や重要文化財となつたあの校舎が相応しい環境の中で美しく建っているだろうか、どのように使われているだろうか、生徒達の表情は生き生きとしているだろうか、先生達には哲学に裏打ちされた使命感が漂っているだろうか、など。大きな期待とささやかな不安を持ち訪問した。

構内の木々は、卒業後五十年を経て空中に枝葉の密度を増し、その中に建つ校舎は良く手入れされ、存在感を一層高め、姿映えのするものとなっていた。これらを維持してきた関係者の文化力に敬意を表したい。特に経済成長至上主義が横溢した戦後の六十年の間に遭遇したであろう存亡の危機に、先頭になって頑張られた方々がおられたに違いない。

土浦一高ではクラブ活動にも力点を置いていたようで好ましい。授業が終わった後も暗くなるまで部活に励むよう指導しているという。校風の一端は幾分感じとれたが、当初の不安が完全になくなったわけではない。校風・伝統はどのようなように形成されるのだろうか。歴史・時代

文節化された社会・地球が健康体となるためには、21世紀の新たな哲学・バックボーン・パラダイムを必要とする。越後妻有の事例は、文化がキーワードの一つになり得ることを示してくれた。

18世紀〜19世紀のイギリスの天文学者、ジョン・ハーシェル(ケープタウンで南天星座図を作った人)の言葉を紹介して終わりにしよう。
Friend! We will do our best to leave the world better than we found it.

- 【略歴】
36年7月 水戸生まれ
55年3月 土浦一高卒業
60年3月 東北大学建築学科卒業
60年4月 (株)岡設計入社
75年4月 取締役仙台支店長
96年10月 仙台支店を分離独立させ、(株)岡設計設立、代表取締役

99年10月 (株)関・空間設計に社名変更
【作品受賞歴】
日本建築学会東北建築賞十回、建設省公共建築賞、戦後の建築百選賞、都市景観大賞、自治大臣賞、文部大臣賞、日本建築事務所協会連合会優秀建築賞、他多数
【社会活動歴】
日本建築学会東北支部常議員、東北大学・県立宮城大学大学院・県立秋田大学各非常勤講師、宮城県・仙台市各委員会委員、多数のシンポジウムパネリスト等を歴任。現在、東北大学研究教育振興財団理事・財務委員長、みやぎ文化PFI協会理事。

卒業生レポート

⑩

新しい価値を求めて

弁護士 大野 金一

高八回(昭和三十一年卒)



私達の年次は、土浦一高卒業五〇周年に当たります。戦後の復興と国際社会への復帰を経て、これから国を作るといふ、夢と希望に満ちた時代に大学に進学し、また社会に入っていくました。

牛久市(旧岡田村)の農家で育った私は、まだテレビも無かった時代、各種職業に関する詳しい経験も情報も無く、ただ難しいことに挑戦する意気込みと将来の進路選択の余地を考えて、東大法学部を、そしてまた司法試験を目指したものです。

大学では、中学で野球と駅伝競争をやっていた腕力と走力を生かして、ハンドボールの部活を四年間みつかりました。

司法試験は、口述試験で失敗し、併願していた公務員試験で自治省(現総務省)に入省しました。将来、弁護士になりその職にありながら政治の世界にという思いもあり、幅広い行政をとということ自治省を選び

ました。農業県の岩手県庁では当時最先端の農業構造改善課も経験しました。

七年の行政官のあと弁護士になって今年が三十五年目にあたります。修習生のとき結婚した妻の父親と一緒に事務所で仕事をしていた関係で、一般的な個人事務所として開業しました。アメリカのローファームのような姿を夢見ていましたが、わが国の当時の大事務所の殆どが渉外事務所、私自身政治への夢もありましたので、今や一般的となった企業法務や渉外関係の事務所に埋没するには抵抗がありました。

個人事務所では、企業や個人の依頼を受けてあらゆる事件に対応するよう努力します。特殊な専門事件を手がけることもあります。各種事件を多数扱いませんから、その経験はその事件限りで、その貴重な知識、経験を生かす機会が少なく、無駄になります。

弁護士の仕事は、やぐさまがいの人物が事務所に押しつけてきたり、オウム真理教に破産宣告を下して壊滅させるための破産管財業務ではオウム教団の残党に狙われるのではなにかという恐怖を経験したこともあります。しかし、上訴審で原判決を破棄させたり、行政の過ちを正したり、社会正義と人権擁護のため仕事をしているという満足感があります

す。

学生時代ハンドボールの部活をしていた関係で財産法人日本ハンドボール協会の常務理事、専務理事の仕事に保わり、オリンピックや世界選手権大会に選手団を率いていった経験も、自由な個人事務所だからこそできたことでしょう。

今、司法界は大きく変わろうとしています。第一に法曹人口、特に弁護士人口の飛躍的な増大であり、第二に裁判員制度の導入と裁判官任用制度の改革、第三は法科大学院の発足です。

長い間五〇〇〇八〇〇名に抑えてきた司法試験合格者を、既に今年は一五〇〇名になっていますが、法科大学院の卒業生が増えくる五年後には三〇〇〇名に、そして近い将来には一気に五〇〇〇名に増やそうというものです。

最近増えた新人弁護士は渉外関係を中心とする大事務所へ吸収され、その大事務所もアメリカのローファームに対抗して、合併等により大型化を進めています。国内の大企業も、旧来の世襲制の顧問弁護士ではなく、専門分野ごとに顧問弁護士を求める傾向にあります。バブル経済崩壊後は倒産事件が激増して倒産専門の弁護士が花形でしたが、これからは知的財産などの専門分野の弁護士が求められるでしょう。個人事務所は、共同化などにより各専門分野の弁護士を育てることになるでしょう。

数年後には、抽選で選ばれた一般市民が裁判に参加する裁判員制度が発足します。従来最高裁判所が決めたと批判が多かった裁判官の選考を一般市民も参加して開かれたものにしていう改革とあ

いまって、従来の硬直化した職業裁判官の意識も徐々に変わりつつあります。

司法試験専門の塾のため大学法学部が空洞化したことと合格者の増大に司法研修所が対応できないという理由で、理論と実践の架け橋にと法科大学院が平成一六年四月に発足しました。しかし、初年度だけで六八校、学生数は五七〇〇余名にのぼり、二年度以降の学生増や滞留者を考えると、非常に低い合格率になり、当初考えていた七〇%程度の合格率で実のある法教育を、という理想とは程遠いものになる。合格者を大幅に増やせないとすれば、法科大学院の淘汰も避けられないでしょう。

冒頭に述べたとおり、この五〇年、日本社会は様変わりしました。戦後から昭和三〇年代までは全くゼロから出発して一〇〇を目指してまあまあの一〇〇まで到達した。その間、皆がそれなりの達成感を、感動を味わってきました。

昭和四〇年代以降に育った人は、まあまあの一〇〇から出発している。情報が発達しているので一三〇までは無理と判ってしまう。努力しても当たり前の一〇〇。それが七〇→五〇まで落ちていくとマイナスの自己評価をし、絶望感を感じ、ある者はそれを社会のせいにする。

一億総中流階級といわれる大半の者は一〇〇に甘んじ、後は楽をすることだけを考える。昭和四〇年代、東大生にマンガがはやって話題になり、役人希望者は天下り先の多い官庁に、民間希望者は倒産しないと考えられていた大企業に人気が集まり、私が夢を持っていた政治家は二世議員が大半を占め、それらが今や

肥大化、硬直化して破綻した。

これからの学生は、どういう価値観を持って、何を人生の目標にするか、非常に難しいことではあるが、物質的には恵まれている現代、従来の立身出世とか己の生活の安定など意味がない。旧来のシステムは瓦解した。それぞれの個性を生かす可能性が出てきた。

国の基本は教育にあり。現在の日本の教育の退廃ぶりは目を覆うばかりであるが、幸い土浦一高には伝統的に情熱的な先生がおられる。勉学に王道はなし。地道ではあるが、目標を定めて、あとは集中力のみ。情報化社会では、効率主義、マニュアル主義が横行する。いま流行のサプリメントと同じようなもので、手作りで食材の味を味わうこともなく、汗水流して目標を達成したときの感動を覚えることもない。何も人生の糧にならない。ノーベル賞受賞者も、NHK「プロジェクトX」の「名もない星たち」も、凡人が精神を集中したときに社会的に価値あるものを創造する。専ら、精進を折るのみである。

【略歴】

昭三一・四 東京大学入学
昭三七・三 東京大学法学部卒業
昭三七・四 自治省入省、山梨県統計課長を最後に昭四四・三退官
昭四四・四 司法修習生
昭四六・四 東京弁護士会登録
平一・四 東京弁護士会副会長
平七・四 関東弁護士会理事
平九・四 日弁連常務理事
他に
東京地方裁判所民事調停委員
日本ハンドボール協会専務理事
日本体育協会評議員

支部だより

土浦支部

土浦支部総会並びに懇親会は、七月十二日(金)午後六時三十分から市内の霞月楼で四年ぶりに開催され、三十人が出席しました。

この間の支部の動きとしては、昨年の夏に開かれた役員会において、豊島貴支部長から「健康上の理由で辞任したい。後任には進修同窓会副会長で元校長の青山和義氏を推薦したい」との申し出がありました。早速審議され承認されました。そして本総会にて満場一致で認められました。

青山支部長は、桜町四丁目在住で、昭和三十六年四月に本校で教員生活を始められ、以後十年間勤務されました。また最後は、創立百周年時の校長として、記念事業の実施に尽力されました。

本総会において青山支部長は、地元の支部として、本同窓会の活動を把握理解し、多くの会員に協力していただけるよう努力したい、また現状を踏まえて支部活動を徐々に充実させていきたいと所信を述べられました。その上で、これまで支部会開催を困難にしていたと指摘された要件(機会の必

要性、通知徹底の難しさ、会則の非整備)を考慮に入れつつ次の活動方針を提案し了承されました。

(一) 支部会は例年七月に開催する

(二) 役員会で会則作成の検討をする

(三) 当面支部会は有志会の形をとり、出席者を中心に徐々に会員増をはかる

その後、青山支部長は同窓会副会長の立場から、進修同窓会総会及び他支部の活動状況についての報告をされ、また所用のため欠席された校長先生に代わり、学校案内を配布し、総会時の校長先生のご挨拶内容や強調事項の紹介をされました。

支部総会終了後、引き続き懇親会が催され、和やかな内にも有意義な一時を過ごしました。各自の自己紹介もありましたが、四年前とはかなり出席者の顔ぶれが変わっていることに時の流れを感じました。

土浦支部は新たな第一歩を踏み出したところです。

(幹事長 堀越恒雄)

八郷支部

八郷町は、一九五五年(昭和三十年)、柿岡を中心とする一町七カ村が合併して発足しました。時折しも、神武景氣と言われる中、集団就職などで都市部への人口集中が著しく、春日八郎の「別れの一本杉」が大ヒットした年でありました。母校の硬式野球部が甲子園に出場した前々年になります。

「八郷進修会」は、その年、同郷の同窓生の親睦を図ることを目的に、先輩の方々のご尽力で誕生しました。その後、年々会員も増え、現在高校三十二回卒業までの百三十一名を会員として、毎年、役員会・総会を開いて活動しています。

今年度も二回の役員会を開き、八月二十日に、国民宿舎「つくばね」において総会を開催しました。ご高齢の大先輩がたのご出席と飲酒への配慮から、送迎バスを手配して幹事が町内を回り、三十名の参加を得ることができました。

会は、亡くなられた会員に黙祷を捧げた後、開会のことば・比企光雄会長(高一卒)の挨拶があり、続いて、会長を議長に議事に入り、会計報告を承認し、役員改選では、比企会長・佐藤芳夫(高二卒)・関肇(高三卒)の両副会長の留任を決め議事を終えました。次に、来賓のご挨拶をいただきましたが、進修同窓会の大曾根宏亮副会長からは、昨年十一月に行われた「旧土浦中学校本館竣工」・

「校旗制定」・「県下中学連合野球大会」の「三つの百年」記念式典の経緯と結果についてのお話を伺い、改めて母校の光輝ある伝統に誇りを感じました。また、村松輝美校長先生からは、母校の指導の現状と進路状況などについてのお話をいただきましたが、その全国屈指の実績を喜び、つくばエクスプレスの開通や入試の全県一区制など状況の大きな変化の中での、母校の今後の更なる発展に、出席者一同期待を大きくしました。

総会を閉じた後、懇親会に移り、先輩・後輩親しく杯を酌み交わしながら和やかに若き日の思い出や近況を語り合い、時の経つのを忘れての盛会になりました。最後に全員で校歌を斉唱し、真鍋台での若き日々に思いを馳せつつ、万歳三唱で散会しました。

今回の喜びは、比較的若い会員

(幹事 三輪志郎)

平成十八年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日 平成十八年四月九日(日) 午後一時
二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年 中四十六・四十七回
卒業五十周年 高八回 定六回
卒業四十周年 高十八回 定十六回
卒業二十五周年 高三十三回 定三十一回

一般会員・周年記念会員の数多くの方々が母校の門をくぐられることを期待しております。
尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

土浦一高ホームページ
アドレス
<http://www.tsuchu1-h.ed.jp>

お知らせ
お便り卒業四十周年記念
同窓会の思い出

私達の四十周年記念の同窓会は恩師六名の方にご出席をいただき、同窓生約百名が出席し平成十七年四月九日(土)に土浦京成ホテルで開かれました。

当日は飲食より会談で盛り上りクラスを超え、いくつかのグループが出来ていました。先生方も若返って往年の姿を彷彿とさせられました。

私達が学年全体での同窓会を最初に企画開催したのは、卒業二十年を目前とした昭和六十年でした。当時は卒業二十五周年には進修同窓会から招待されるのでリハーサルとして五年前に開催しておこうとの事でした。

その後平成三年に二十五周年、平成八年に三十周年記念同窓会が開かれ今回の同窓会となりました。過去の同窓会ではその年代毎の自分達の立場や状況を確認しつつも未だ、高校在学時の思い出話が多かったのですが、今回の同窓会では健康の事、家族の事、今後の生活等の話と内容的にかなり違っていた様でした。

翌十日(日)には、進修同窓会の年次大会が土浦一高体育館で開かれ、私達の仲間からも多数参加致しましたが、やはり卒業六十年、

五十年、四十年、二十五年と招待された中では先輩達の方が出席は多かった様でした。

午後からのホテル観光での懇親会には有志二十余名が出席し存在感をアピールしました。

今回の同窓会で痛感したのは、私達も還暦目前で夫々第二の人生を始める時なので、この機会に転居、もしくは職場の変更等が多く連絡が取りづらかった事でした。

参加者も過去三回の同窓会には百五十名前後でしたが、今回は百名程度でした。返信のコメントにもその様な事情である事が多々記してありました。

十年後の同窓会にはたくさんの同級生が元気で参加できる事を期待して居ります。

高校十七回卒 栗山 和紀



卒業40周年記念同窓会の懇親会

卒業二十五周年を迎えて

去る四月九日、同窓会総会に先立ち卒業二十五周年を記念して学年同窓会を開きました。一高創立百周年を祝って以来の大きな催しでした。

はやる心を落ち着かせ、自分のクラス氏名を告げている側から肩を小突かれ、いきなり懐かしい思い出話に花が咲く。いつの間にか順番を待つ長い列ができました。

祝宴の前の集合写真では、遠路はるばるやって来る人が多かったせいか、いざシャッターを切ろうとするたびに一人また一人とやって来て大分延びてしまいました。そんな中でも誰からもなく場を和ます冗談が出て、和やかな雰囲気になりました。

宴会は、清水健三先生を初め物故者への黙禱に続き、恩師を代表して上木学年主任のあいさつから始まりました。「みなさん、今晩は」という張りのある第一声。思わず拍手と歓声が上がリ、一気に盛り上がりました。

飯村学年副主任の乾杯の音頭とともに皆待ちかねたように恩師の先生方のもとへ。先生方のテーブルは、引きも切らずに卒業生たちが押し寄せ懐かしい思い出話に花が咲きました。

しばらくして、A組の風間先生

から順番に話をしていただきました。先生方は皆様お元気な様子です。近況報告とともに私たちが過した当時の思い出などをそれぞれを持ち味を前面に出されて話して下さいました。目をつぶれば木造校舎で過した当時の授業風景が甦り、嬉しいやら照れくさいやら、何とも言えない気持ちになりました。

ました。

同級生同士の近況報告もあちらこちらの席で繰り広げられ、自分たちの話ばかりでなく子どもたちの話でも盛り上がりしていました。言葉を交わせれば二十五歳の歳月を超えてあの頃のままの親しさが甦る。

「級友はいいもんだ」と改めて実感した夜でした。予定していた時間にはあつという間に過ぎ去り、後ろ髪引かれる思いで会場を後にしました。

四月十日の同窓会総会では、先輩方が大勢いらつしやる中、招待学年として大切に扱われ恐縮すると共に一高の伝統の重さ、懐の深さに感銘を受けました。

このような機会を設けて下さり本当にありがとうございました。同窓会役員の方々に感謝を申し上げますと共に母校土浦一高の益々のご発展を祈念いたしまして、お礼の言葉とさせていただきます。

(小野 勉)



高32回同窓会一同

母校だより

第五十八回一高祭 一高の志士たち

水上 遼

一高祭とは、いったいなんだろう。私が高校三年間を通して見てきたこの巨大な行事は、今や半世紀を越えて継続している。部活や同好会と異なり、趣味のまったく違う生徒たちが集まり企画され、そして最終的には全校生徒が何らかの形で一高祭に関与していくのである。

私の思いでは、一高祭は毎年必ずあるものではない。自然と用意されているものではないのだ。それは調度、明治時代が維新志士たちの尽力の果てに訪れたことに類似していると思う。委員会は完全なる自由参加制であるから、一高祭に対して無気力であれば、きつと一高祭はなくなるのである。

私が知る限りでも、ある委員会が潰れたことがある、または潰れそうという話は何度かあった。ではそれで退嬰してしまったか、という違うのだ。一高には志士がいる。腕試し、交流、誇り、目的や考えは違っても、新しい一高祭を作ろうと彼らは息巻いている。

だから彼らは団結し過ぎることは決してない。お互いの意見を激しくぶつけ合い、対立し、紛糾する。しかし、委員会の枠を脱すれば良き親友同士なのだ。私が見てきた一高祭とは、こうした気風以外の何物でもない。

だから私は、こうした志士達と知り合い、共に対等に議論できた

ことを、一高生活の中でもっとも誇りに思う。委員長、副委員長、先輩、後輩、担当者、一般委員、そして一般生徒、様々な枠を超えて出会えた彼らを私は一生の親友だと思う。

委員の人数が少なくなつて、やや不安になったこともあったが、後輩の中にも志を持つ者が数多くいることを確信しているのだ。土浦一高における五十八年の一高祭時代―それはまさに志士達の時代である―はまだまだ続いていくのだらう。後輩達がこれからもそこで思う存分活躍できることを祈る。

最後になつたが、私に多くを教えて下さった先輩方や先生方、最も身近な仲間であつた同輩達、そして後輩達に感謝の意を表したい。特に、今回一高祭の写真を撮影・提供してくれた放送委員長の高島君、どうもありがとう。



一高祭

一高オリンピックを終えて

一高オリンピック実行委員長 松信 遼

「一高オリンピック実行委員長をやってくれないか」先生にそう言われたときは驚いたが、人生で一度しかないチャンスだと思ひ、委員長を引き受けることにした。

一高オリンピックに向けての話し合いでもいろいろなことがあつた。多くの実行委員や先生から去年と全く同じ種目ではつまらないだらうから、違う種目をやろうという意見が出て、ソフトボール、テニスなど多くの意見が集まつたが、グラウンドの広さ、初心者では



一高オリンピック

試合にならないという意見などがあり、新たに二年に女子のバスケットボールを増やすことしかできなかつた。さらに、大縄ではなく綱引きをやりたいという意見もあつたが、大縄を勝つてしまった以上大縄をやらざるを得ないということになった。

また、種目が決まつたあとも、時間の設定や人数調整などの問題があつた。三年生は、文系、理系を分けているため、男子二十人ずつぐらいのクラス、女子が七人だけのクラスなどがあり、大縄などの全員種目しかでられない人もでてしまった。

これらをふまえて当日の種目は、一三年男子サッカー、男女ドッジボールなどの種目となつた。当日は、最初順位が上でも、大縄・リレーなどで大逆転もあり、とても盛り上がった。

僕は、今回できたこの体験を将来に生かしたいと思う。

歩く会が終わつて

第37回歩く会実行委員長 山口博史

去る十月十四日、歩く会が開催されました。歩く会は今年で三十七回目を迎えるということで、そのような伝統ある行事の実行委員長に就任するには不安もありましたが、周囲の支えのおかげで無事歩く会を終了させることができました。ご指導くださった先生方、共に働いてくれた実行委員の友人たちにこの場を借りて御礼申し上げます。特に、今年度歩く会の担当となられた赤田部先生には、大変お世話になりました。重

ねて御礼申し上げます。

平坦であつた昨年のコースとは異なり、今年は起伏のあるコースとなりました。石岡市を出発とし、恋瀬川沿いのサイクリングロードを進んだ後、山を越え、市街地を通り本校に至るルート。今年のコースの風景は変化に富み、非常に歩く会らしい、良いコースで会つたと思つています。

天候も、予報では雨とのことでしたが、いざ当日となつてみると一転して快晴となり、暖かな日差しのもと、歩く会を実施することができました。

一日に三十キロ近くの距離を歩くということは日常ではないことで、歩く会の実施については友人達から戸惑いの声も多く聞かれましたが、当日歩いている姿を見ると、誰も楽しそうで、実行委員としては、とても嬉しく思いました。

来年以降も、事故など無く、このすばらしい行事が続いてゆくことを願っています。



歩く会

職員室だより

理科

平成十六年度末に行われた人事異動により、全日制の阿須間謙三(高十九)教頭先生が八郷高校の校長先生として、全日制教諭の結城治夫先生が石岡二高に、定時制講師の坪雄太先生が城北高校の新採教諭として転出されました。そして、全日制に柴沼克仁教諭を茨城東高校より、定時制に講師の藤代洋子先生を竜ヶ崎南高校より迎えました。

理科室は特別棟にありますが一階から順に紹介します。一階には原田晋市教諭(高二十)、臼井健司教諭、飯竹修教諭のいる化学室があります。化学I教室は、二年前に床を張り替えたり実験台を交換するなど、内装が新しくなりました。二階には綿引隆文教諭のいる物理室があります。三階には

横田宏之教諭、槇野繁樹教諭のいる生物室があります。他の職員室が次第にエアコンが設置されつつある今日、未だに化学室・物理室・生物室ともにエアコンがなく、夏は扇風機で、冬は石油ストーブで暑さ寒さとの格闘の日々を送っています。定時制職員室には、福田良市教頭先生と講師の藤代洋子先生がいます。以上全日制九名、定時制二名の先生方で熱心に授業を展開しています。

今年度は、米国の先生との連携

によるMTP(マスターティーチャープログラム)に取り組んでおり、土浦一高の名を海外に向けても発信中です。

定時制

定時制の生徒は男子六十四名、女子五十名で、教職員は九名です。定時制は勤労青少年の学びの場を確保する目的で制度化されましたが、最近の生徒の状況は非常に多様化しています。中学校で不登校だった生徒が半数近くおり、年齢層も十五歳から七十四歳までの生徒が学んでいます。そういう状況を踏まえ「当たり前のことが当たり前にできる人間の育成」を目標に、個に応じた心の通う教育を精力的に行っています。

授業は勿論のこと、課外指導、生徒会活動や部活動、学校行事等を活性化し多様な生徒の活動の場づくりを計画的に推進しています。

定通体育大会での活躍はめざましく、二十名の選手が全国大会へ出場しました。砲丸投げで五位入賞、ちなみに昨年は女子柔道で準優勝という成績でした。オセロクラブは県大会優勝、強化指定校に選ばれ頑張っています。新聞の投書欄への投稿事業では、掲載されることで自信が生まれているようです。県内唯一文化祭第四回「星光祭」は十一月に開催されます。

「おはよう。」更なる飛躍を期して、今夜もまた始まりました。

部活動だより

演劇部

二年 高木 茜

一つの物語を自分たちが思い描く背景の中で、自分の中にもう一人の自分をつくり、演じる。それが、演劇であり、私たち演劇部でもあります。

現在は、部員十名と若干少なくなりましたが、少人数だからこそ、少ないながらも個性豊かな部員達が四苦八苦しながらも活動しています。もちろん、ドラマという監督や、大道具さんのボジションも、もちろん自分たちでやるわけですから、自由な創造物が作れるぶん、足りない技術を補うためのことの必要性や、この場面はこうだったといったなどというような意見の衝突もしばしばあります。しかし、それも、良い作品を作るため。楽しいことも辛いこともすべて含んで、最後には良いものをつくれたら、と思います。練習に励んでいます。

今年度は演劇部初の試みで、東京の天王洲アイルでの公演を行いました。プロの方も公演を行うような大ホールで、普通の舞台には無いような照明機材の数々、オペラ座を思わせるような客席・ホール・スタッフの方々の手際には驚かされるばかりでした。そんな高校生には不釣り合いではと思われながらも場所でしたが、とても緊張しながらも、周りの方々の多大な援助もあり、自分たちでできるだけの力を出し切り、一高演劇部らしい演劇ができたことと思います。

十一月には県大会を控え、部員達には初心に返りつつもさらなる高みをめざして現在もう練習中です。二年生にとって、もしもしたらこれが最後の大会となるかもしれない。まだまだ壁も多く、辛いこともあると思いますが、悔いだけは残らないよう、がんばっていくつもりです。

できるならば、ひとりでも、多くの人に演劇に興味を持ってもらえよう。

合唱部

二年 磯野 真里

合唱をやっている良かったと、この時までには思っていたのはなかつたでしょう。音楽を通じてすべての人々とながることができると実感した瞬間でした。

それは、七月三十一日。青森県で行われた第二九回全国高等学校総合文化祭におも。前日の交流会では見事な方言や訛りを披露していた全国の高校生が、ステージの上では、すばらしいハーモニーを響かせていました。大きな舞台上に緊張ぎみの私たちも、今まで万全の準備をしてきて下さった青森の高校生の皆さんを初めとしてたくさんの方々の笑顔に支えられ、自信を持って演奏に臨めました。

私たちの今回の演奏の目標は、今まで皆で考えた詞に込められた深い思いをたくさんの人々に丁寧に伝えることでした。そのため、舞台上に上った私たちの顔には笑みが絶えませんでした。二曲目には、ミュージカル「CATS」の一曲を合唱青森スペシャル版にアレンジし、猫の衣装と軽快なダンス、道具を使って楽しい舞台に仕上げることができました。

大きな手拍子や拍手を頂けたときは、達成感が体で震えるようでした。そして、文化祭合唱部門の最後を飾るのが全員合唱です。私たちと同じ高校生によって創られた希望に満ちた未来へ向かっていくのにふさわしい曲。そのあまりに重厚なハーモニーに、だれもが喜びに満ちあふれていました。さらに、すべてが終了した後の会場の外でも、歌が歌を呼び、いつまでもたつてもそのメロディが絶えることはありませんでした。

初めて出会った名前も知らない人々がたつた一つの共有する歌を歌うことで心をつなぐことができる。それが、音楽の力なのではないでしょうか。必要なのは、歌が好き、人が好きという気持ちだけ。あのときの感動は、今でも私の大切な思い出になっています。

なっています。この感動を、また別の誰かに伝えられたらいいと思います。

弦楽部

二年 仲谷 陽一

「弦楽部」という部を知らない方も多いことでしょう。それもそのはず、現在のように活動するようになったのは三年前のことなのですから。このような歴史の浅い我が部は歴史の長い旧本館の一室をお借りして日々練習に励んでいます。

実は弦楽部のような形態の部活動は県内でも数えられるほどしかありません。何故ならば、弦楽部はお金と手間がかかり、元々引いてきた人も少ない、そして、上達するのに時間が相当必要と難題が多いからです。しかし、先輩方のご支援、ご指導により七丁の楽器を買っていただき、高校から始めた人たちが半数いるにもかかわらず、他校に引けをとらない演奏を維持しております。

私たちの主な活動は県南、県高校芸術祭への参加、月一回の旧本館でのミニコンサート、一高祭、スプリングコンサート(定期演奏会)の実施です。昨年度は、全国高校文化祭に県代表として出演しました。

旧本館の一般公開にあわせてのミニコンサートは私たちが最も大切にしている活動です。大会らしい大会の我が部にとっては演奏の機会が貴重であり、常に目標になる我が部を支える最も大切な活動です。

また、来年度のスプリングコンサートは来年三月十九日を予定しております。場所は土浦駅前の県南生涯学習センター多目的ホールです。一年間の総決算、そして二年生の引退の演奏会となります。旧本館のミニコンサート・スプリングコンサートともども、もしお時間がございましたら、是非お寄り下さい。

平成十七年度入試報告

公立校の目覚新に

現役進学率六四％超える

進路指導部長 門井 了

平成十七年度入試は、理数科募集廃止で一クラス減にもかかわらず例年に勝るとも劣らぬ合格実績を出した昨年度を受けて、結果が目玉されましたが、東北大二九名(新卒二二名)、筑波大四六名(三八名)、東大二六名(一五名)、一橋大一名(七名)、東工大七名(六名)、京都大七名(六名)等々、国公立大の合計が一九九名(一四六名)と大健闘でした。特に東北、一橋、京都の現役合格者は例年に比べて特筆に値します。また、国公立大の現役合格者数一四六名は、ここ何年か一二〇〜一三〇名であったのが、一気に一五〇名に近づく数字です。私大では、早稲田大九六名(六〇名)、慶応大六一名(三一名)、東京理科大九三名(四五名)等の数字が光ります。

新卒生の進学率ですが、このところ六〇％を割って低迷していたのが、昨年度六四・一％と六〇％台を回復しました。難関大志向の続く中、国公立大学の合格者が一四六名と増えたことが大きく関係していると思われます。私大の進学者数には特に変化がありませんので、今後六〇％台半ばまで上昇した進学率を維持し、かつ上げるためには、難関大志向はそのままに国公立大の合格者数が増えることが要求されます。受験は入学当初から始まっているという意識を、本校生諸君がどこまで本気で持つことができるかがポイントです。本校生の国立大志向、難関大志

向は、今年度の入試でも変化は見られません。新卒生の筑波、東大、東北大、東工大、一橋大、お茶の水、京都大の七大学の延べ受験数は二八六名(昨年二七〇)で、これは国立大延べ受験者総数四一四名(昨年三八一)の六九・一％(昨年七〇・八％)にあたります。合格者数と実受験者による合格率では、これまでの八〇名台から、昨年八七名、四一・八％と回復、本年は九五名、四三・〇％と飛躍しました。新卒生が合格した国立大学数は三年連続二五大学でした。

東大の受験結果は、文系九名(新卒生四名)、理系一七名(新卒生一名)の合計二六名(新卒生一名)が合格しました。後期で三名(新卒生二名)合格しましたが、前期試験終了後も緊張感をゆるめることなく後期対策に万全を期し、最後までねばり強く辛抱した結果です。

医学部は、国立大学医学部医学科に限定すると、一六名(昨年一九名)が合格、新卒生では延べ四〇名(昨年二五名)が受験し、筑波大に四名、山形大に二名、東北大、福井大、山梨大、信州大、宮崎大の各大学に一名ずつ、計一一名(昨年五名)が合格しました。二桁に乗せたのは画期的です。

私立大の総受験者数(新卒生・過年度卒生の延べ合計数)は、一三七二件、合格数は七〇七件、新卒生に限ると、受験者数が前年比一九名増、合格者数では五一名増の三六三名でした。早・慶・上智の合計受験者数は二九六名で、昨年比四一名減、合格者数は二一名減でした。

昨今、公立校の時代は終わった等のマスコミ評を耳にしますが、生徒達には志を高く持たせ、指導体制を強化して、そうした風評を打破していく所存であります。

平成17年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

大 学	合格者	新 卒
北海道大	1	1
東 北 大	29	21
山 形 大	2	2
茨 城 大	11	8
筑 波 大	46	38
群 馬 大	1	0
埼 玉 大	3	3
千 葉 大	10	5
お茶の水大	5	2
電気通信大	1	0
東 京 大	26	15
東京医歯大	2	2
東京外語大	4	3
東京学芸大	1	1
東 工 大	7	6
東京農工大	4	1
一 橋 大	11	7
横浜国立大	9	6
新 潟 大	2	0
金 沢 大	1	0
福 井 大	1	1
山 梨 大	1	1
信 州 大	1	1

大 学	合格者	新 卒
静 岡 大	1	1
名古屋大	1	0
三 重 大	1	1
京 都 大	7	6
大 阪 大	2	1
神 戸 大	1	0
奈良女子大	1	1
和 歌 山 大	1	0
山 口 大	2	0
熊 本 大	1	0
宮 崎 大	2	1
国立大計	199	135
(医学科)	(16)	(11)
茨城県医療大	2	2
首都大東京	6	6
横浜市立大	1	0
都留文化大	3	1
静岡県立大	1	1
大阪府立大	1	1
公立大計	14	11
防衛医科大	1	0
大学校等計	1	0
国公立短大	0	0

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	16	10
学習院大	17	10
慶 応 大	61	31
国際基督大	3	2
上 智 大	15	5
中 央 大	64	30
津 田 塾 大	9	4
東京女子大	14	9
東京理科大	93	45
日本女子大	13	8
明 治 大	70	33
立 教 大	31	17
早 稲 田 大	96	60
法 政 大	23	6
北 里 大	17	9
芝 浦 工 大	20	15
日 本 大	22	5
同志社大	1	1
立 命 館 大	13	3
そ の 他	109	60
私立大計	707	363
私立短大	0	0
合格者総数	921	509

平成16年度 進修同窓会決算書

収入額 一金 15,968,680円也
支出額 一金 14,309,729円也
差引残高 一金 1,658,951円也

【収入】

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
1 繰越金	5,195,116	5,195,116	0	前年度繰越金
2 終身会費	100,000	150,000	50,000	5名
3 年会費	8,000,000	8,678,000	678,000	2,629名他
4 入会金	1,775,000	1,765,000	△10,000	新会員全・定353名×5,000円
5 寄付金	0	180,000	180,000	下記に記載
6 雑収入	884	564	△320	預金利息
合計	15,071,000	15,968,680	897,680	
ご寄付者名	卒業25周年同窓生一同様、高6回卒業生一同様より			

単位：円

【支出】

項目	予算額	決算額	残額	備考
1 総会補助	800,000	909,009	△109,009	資料、会場設営代外
2 会報発行費	3,900,000	4,670,602	△770,602	会報印刷、送料代
3 通信費	200,000	72,200	127,800	切手、はがき代
4 卒業記念品費	150,000	144,000	6,000	卒業証書用簡代
5 卒業60,50,40,25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品積立
6 会議費	300,000	127,997	172,003	
7 支部連絡費	300,000	220,000	80,000	支部会補助
8 生徒奨励費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助
9 別途積立金	5,000,000	5,000,000	0	積立会計へ
10 慶弔費	100,000	0	100,000	
11 事務局費	700,000	471,224	228,776	サラト事務処理費他
12 旧本館活用事業費	1,482,500	1,094,697	387,803	看板、展示パネル等代
13 予備費	538,500	0	538,500	
合計	15,071,000	14,309,729	761,271	

上記のとおり決算しました。

※項目間の流用を認める。

平成17年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成17年3月31日

監事 梅澤 正之進 印
監事 田嶋 栄吉 印

進修同窓会会務分担 (平成17年度)

1. 本部

担当	本部役員	学校	主な業務
総務	横田 中川 木島 説田 小野(慶) 谷中	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	平田 小野(治) 石川 渡辺 柴沼 小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	大曾根 木島 上木 谷中 堀越 宇田川 宇田 鈴木(志) 鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会誌の編集・発行
名簿	青山 小網 柳沢 野村 草薙 小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	大曾根 青山 櫻井 谷中 野村	教頭 校内幹事	事務局と相互連携
監事	梅澤 田嶋		本会会計の監査

2. 支部

支部会等に際して、本部に出席要請がある場合は、会長または下記の副会長のうち1名が、校長(または代理)とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りではない。

横田、平田、大曾根、青山、植木、幡谷(浩)、櫻井、中川

3. 進修同窓会校内幹事

高30 路川 治(地公) 高37 幕内 研司(数学) 高38 関 勝一(国語)
高40 大塚 健司(地公) 永山 雪夫(事務室長) 藤田あかね(主事)

平成17年度 進修同窓会予算書

収入額 一金 13,334,000円也
支出額 一金 13,334,000円也
差引残高 一金 0円也

【収入】

単位：円

項目	予算額	前年度予算額	比較増減	備考
1 繰越金	1,658,951	5,195,116	△3,536,165	前年度繰越金
2 終身会費	100,000	100,000	0	
3 年会費	9,800,000	8,000,000	1,800,000	
4 入会金	1,775,000	1,775,000		全325人、定30人 355人×5,000円
5 雑収入	49	884	△835	利息
合計	13,334,000	15,071,000	△1,737,000	

【支出】

項目	予算額	前年度予算額	比較増減	備考
1 総会補助	900,000	800,000	100,000	資料、会場設営外
2 会報発行費	3,700,000	3,900,000	△200,000	会報印刷、送料代
3 通信費	100,000	200,000	100,000	切手、はがき代外
4 卒業記念品費	150,000	150,000	0	卒業証書用簡代
5 卒業60,50,40,25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年積立
6 会議費	200,000	300,000	△100,000	
7 支部連絡費	300,000	300,000	0	支部会補助
8 生徒奨励費	2,000,000	1,200,000	800,000	生徒会補助、 進路指導助成
9 別途積立金	2,200,000	5,000,000	2,800,000	積立会計へ
10 慶弔費	100,000	100,000	0	
11 事務局費	700,000	700,000		サラト事務処理費他
12 旧本館活用事業費	1,993,000	1,482,500	510,500	
13 予備費	591,000	538,500	52,500	
合計	13,334,000	15,071,000	△1,737,000	

※項目間の流用を認める。

編集後記

◇◇◇◇◇
進修同窓会会報第62号
発行日 平成十八年一月一日
窓を開けると弦楽部の音楽が流れてきて
気持ちよく和ませてくれ、運動部の生徒の頑
張っている声が流れてきて頑張りといっ
ているようです。
この62号のために、各方面の方々から貴
重な原稿・写真をいただき、厚く御礼申し
上げます。このたびは、諸般の事情で、発
行が遅れたことをお詫びいたします。
新年明けてから皆様方にはこの会報が届
くと思いますが、今後とも進修同窓会をよ
ろしくお願いいたします。

会費納入の
ご協力とお願い
平成十六年度の会費納入状況
は、三月末現在、二、六二九名の皆
様から、八、六七八、〇〇〇円を頂

きました。
今年度も納入して頂きたく、振
替用紙を同封いたしました。会費
は同窓会事業費に充てられますの
で、ご協力のほどよろしくお願い
申し上げます。

会報編集委員会
編集委員長
編集委員

校内

藤永大 関路浅 鈴宇宇 鈴堀谷 上木大
田山塚 内川野 木田川 木越中 木島根
あ雪健勝研 淳邦仁志 良幹幸宏
かね夫司一 司治勉一 利郎郎 博雄夫 夫亮